

スペイン語圏を知る本(その21)

コンチャ・ロペス・ナルバエス著 宇野和美訳

『約束の丘』

(行路社 2001)

評者 坂東 省次

1492年と言えば、コロンブスのアメリカ大陸到達によって広く知られるが、この年は711年に開始したイスラム教徒のスペイン支配が、最後の牙城グラナダ王国の陥落をもって終わりを告げた年でもあり、また数百年にわたりスペインの文化と経済の発展に多大の貢献をしてきたユダヤ人が、イサベル女王とフェルナンド国王の下で、キリスト教への改宗もしくは国外退去を迫られ、およそ15万人にのぼるユダヤ人がスペインを去って、西欧諸国、アフリカ、そしてオスマントルコへと旅立った年でもある。

スペイン北部にバスク地方の首都でバスク語でガステイスとも呼ばれる人口21万のビトリア市がある。ここはかつてスペイン北部最大のユダヤ人街のあった市で、15世紀には1000人のユダヤ人が住んでいたと言われるが、「ユダヤ人追放令」によって、1492年6月27日、ほとんどのユダヤ人がフランスの南部バイヨンヌに移住したのであった。本書『約束の丘』は、バイヨンヌに移住したユダヤ人の子孫の間で、語りつがれてきた逸話を基にして書かれた、ユダヤ教徒とキリスト教徒のあつい友情の物語である。

この物語は1492年3月のとある日に始まる。舞台は、ビトリア市。そこに親子三人の家族が住んでいた。先祖代々住んでいた古都トレドからこの町に逃げてきた両親はユダヤ教徒ではあったが、それは心の内に秘めたこと。表面上は名前を変えて、生粋のキリスト教徒を装って生きていた。子供のファンはキリスト教徒として育てられたのであった。

しかし、ファンは両親がユダヤ教徒であることを突如として知る日がやってきた。それはファンにとって青天の霹靂以外の何物でもなかった。その日を境に自分がキリスト教徒とユダヤ教徒のいったいどちらなのか、ファンの迷いと煩悶の

日々が続くのであった。1492年3月31日、国王陛下の伝令が伝えられた。「キリスト教に改宗しないユダヤ教徒は、国内から三ヶ月以内に立ちのき、二度ともどることのないよう、ここに命ずる。退去しない場合は、死刑および全財産没収の刑に処するものとする。」

キリスト教とユダヤ教の選択を迫られたのは、ファンひとりではなかった。今や、スペインに住むすべてのユダヤ教徒に課せられた最後の選択でもあったのだ。ユダヤ教徒の毎日は一転して、不安と苦悩に満ちたものとなったことは言うまでもない。そんな中、ペストが発生して町中に真夏の山火事のように広がり、ユダヤ教徒はさらなる打撃を受けた。一刻も早く市を去らなければならなかった。しかし、ユダヤ教徒の多くは勅令の撤回に一縷の希望を抱いて市にとどまり、ユダヤ人の医者たちは宗派を超えてキリスト教徒の市民をペストから救うべく立ち上がったのである。

まもなくペストから市は救われた。ビトリアは、喜びにわきたち、神に人々は祈った。がしかし、勅令が撤回されることは決してなかった。6月27日の朝、ユダヤ人は旅立の日を迎えた。ユダヤ人街の門のところで、キリスト教徒の一団が待ちうけていた。ビトリア市の代表、ファン・マルティネス・デ・オラベはこう言ったという。「お気持ちを察いたします。最後に、私たちに何かしてさしあげられることはございませんか。私たちの感謝の気持ちです。あのいまわしいペストのとき、そこにおいでになる先生方が身を粉にして尽くしてくださいました。このご恩は決して忘れません。何か少しでもお役に立てることがあれば、どうぞおっしゃってください。」

このときユダヤ教徒が願い出たのは、亡き兄弟たちの眠るユダヤ人の丘、フディスメンディの墓所をそのまま残すことであった。両教徒の間で結ばれたこの約束は、その後何百年もの時を超えて守りとおされたという。かつて「ユダヤ人の丘」と呼ばれた丘の片隅には、今、ユダヤ教とキリスト教の和解の希望の歴史を刻む記念碑が立っている。

ばんどう しょうじ(教授・スペイン語学)